もう一つの貝塚研究史

西山太郎

目　　次

1．はじめに ……547

2．貝塚研究史 ……547

3．精神生活からみた貝塚研究史 ……554

4．まとめ ……560

1．はじめに

貝塚は全国でおよそ3,200箇所、千葉県では650箇所の所在が確認されている。これらの貝塚については、諸先学によって様々な観点から研究されている。現在は自然科学的手法も取り入られ、貝塚研究の進歩は目覚ましいところである。

ところで、梅原猛・宗左近は、貝塚の意味するところについて、次のように論じている[1]。

梅原日本学を提唱している梅原猛は、貝塚について「かっては貝の捨て場と考えられたが、現代は文字通り、貝の〝塚〟つまり、墓と考えられるようになった。…（中略）…河野廣道は貝塚でもアイヌのイオマンテ、熊送りに似た儀礼が行われていたと考えた。この説は今や通説に近いものとなっている。」（梅原1992;p.201）と述べている。

詩人の宗左近は、「貝塚のある千葉県の某博物館では、事もなげに、こう説明していた。「貝塚は、ゴミ捨場です」。」

「数年後、また、その博物館へいった。すると、一人の学芸員がいった。「貝塚についての学説が、三年前に変わったんです」。…（中略）…「貝肉処理工場、ということになったんです」。」

「ゴミを棄てるためだけなら、貝肉を処理するためだけなら、ほうぼうに分散すればよい。それなのに、なぜ同じ場所で小さな山を盛り上げるのか。

特別な場所を設けたかったからである、つまりは聖なる場所を。」（宗1991；p.55-56）と述べている。

そこで、現在の貝塚観を再確認するため、千葉県文化財センター刊行の『房総考古学ライブラリー3』（県セ,1993）をみた。すると、貝の捨て方については「ここに捨てなければならないと言う約束事のようなもの」（p.274）があり、「貝塚が単なるゴミ捨て場でなかったことは明らかです。」（p.274）とあった。これからすると、梅原猛の考えもあながち間違えていると言えないのである。梅原・宗説に一考を感じたのは、実は、筆者の不勉強であったらしい。

このようなことから、ここでは精神生活的観点からの貝塚研究が貝塚研究史上でどのように取扱われてきたのか。貝塚研究史を概観し、それを再確認してみたい。また、貝塚のみならず広く縄文時代の社会・文化を研究する上で、そのような観点をどのように取扱っていくべきか考えてみたいのである。

2．貝塚研究史

貝塚研究史を体系的にまとめたものとしては、堀越正行（1974）、江坂輝彌（1978）、戸沢充則（1989）、牛沢百合子（1980）、後藤和民（1978）などがある。この他、千葉県（千葉県教育委員会,1983）

など県単位、市川市堀之内貝塚（市立市川考古博物館,1992)など遺跡単位の研究史も数多くある。

ここでは貝塚研究の動向を知るために、考古学研究としての総合的観点から江坂輝彌(1978)、戸沢充則(1989)、自然科学的観点から牛沢百合子(1980)、集落論としての貝塚という観点から後藤和民(1978)などその主題が比較的明確なものを取り上げ、貝塚研究史を概観してみたい。

（1）考古学研究からの貝塚研究史

第Ⅰ期（明治10年～大正）　E.S.モースによる大森貝塚の発掘で日本の貝塚研究が科学的学問分野の一つとして始められ、大正時代の人種論争に関わる人骨収集としての発掘が行われた時期である。

江坂輝彌は、明治前半について「八木のような鋭い見解を示す学者も存在したが、各地の貝塚の探索発見と、そこでどのような遺物が採集されたかという、採集遺物観察までに終始したものが多く、遺跡を大規模に発掘調査をおこなったものはなく、遺跡の遺構、立地状況などを詳細に紹介したものはない。」(江坂1978『ジャーナル』144;p.4)、明治後半について「一般人にも趣味で考古学を研究する人々が次第に増加」(江坂1978;p.5)した時期とし、その例として『地底探検記』(1907)、『地中の秘密』(1909)の著者である江見水蔭をあげている。また、大正前半については、日本石器時代人の人種論としての縄文文化人コロボックル説、アイヌ説論争がやや衰え、「偉大な学界のリーダ坪井正五郎を失ったことで、研究も停滞気味であった」(江坂1978;p.6)、大正後半については「縄文文化人の完全骨骼発掘目的」(江坂1978;p.6)の調査が各地で行われたとしている。

貝塚研究に目を向けると、日本に於ける貝塚研究は、明治10年(1877)の大森貝塚の発掘と明治12年(1879)の『SHELL MOUNDS OF OMORI』の刊行に始まり、明治12年(1879)には、佐々木忠次郎らによって日本人による初めての学術的発掘調査が茨城県陸平貝塚で行われ、明治13年(1880)には『常州陸平介墟報告』として著わされた。その後、下村三四吉・八木奘三郎による『阿玉台貝塚探求報告』(『東京人類学雑誌』第9巻第97号,1984)による土器形式の細分等の試みなど考古学的研究の萌芽をみることができる。

第Ⅱ期（大正末より昭和時代前半）　東北大学理学部地質学古生物学科の松本彦七郎は、大正8年(1919)以来、宮城県桃生郡河南町宝が峰貝塚・桃生郡鳴瀬町宮戸島里浜貝塚・宮城都七ヶ浜町大木囲貝塚等松島湾岸の諸貝塚を分層発掘した。これを契機として、縄文土器の編年的研究が本格的に開始されることになった。八幡一郎は、大正13年(1924)、加曽利貝塚を調査し、加曽利E式と加曽利B式が層位的に出土することを指摘した。また、大山史前学研究所は関東各地の貝塚を調査し、縄文土器の編年的研究を進めた。昭和元年(1926)、甲野勇は埼玉県岩槻市真福寺貝塚を発掘するとともに、昭和3年(1928)には貝塚の分布から海岸線の変化、昭和10

年(1935)には関東地方における縄文土器の編年的研究成果を発表した。一方、大正末年から昭和初め頃に、山内清男は東北地方各地を発掘し、東北地方南部太平洋岸の縄文土器の編年学的研究の大綱を組み立てた。

昭和元年(1926)、小金井良精らが実施した市川市姥山貝塚の発掘では、縄文中期集落の一部、竪穴住居跡群が明らかとなった。江坂輝彌は「この大規模な調査はわが国の縄文時代の貝塚研究に一エポックを画するものであった」(江坂1978;p. 6)と評価を加えている。

その後、関東地方における貝塚調査は、八幡一郎・坂詰仲男・芹沢長介・江坂輝彌らによって積極的に進められ、ようやく竪穴住居跡に関心がもたれるようになった。また、昭和14年(1939)、杉原荘介・坂詰仲男らによって千葉県船橋市飛ノ台貝塚で炉穴跡の発掘調査も行われた。

第Ⅲ期(戦後の研究)　日本考古学が戦争の重圧から解き離され、純粋科学的に研究されるようになった時期である。これを戸沢充則は「自然科学的な研究の手法を大幅に取り入れた、いわば縄文人の生業活動や食生活の復原を目指す研究」(戸沢1989;p.14)を行う時期としている。江坂輝彌は1970年代までを5期に区分している[(2)]。しばらく、これに沿ってみてゆくことにしよう。

1947年(昭和22),1948年(昭和23)ごろを、「ようやく戦後の学会活動が旧に復し始め、それ以上の活気を呈し始めた時期であり、関東地方でも東京を中心として、各大学・研究所などによる発掘調査研究が盛ん」(江坂1978『ジャーナル』147;p. 2)となった時期としている。

千葉県市川市にジェラード・グロード神父によって設立された考古学研究所は1948年(昭和23)～1949年(昭和24)に市川市姥山貝塚の発掘調査を行った。また、岡本勇の横浜市野島貝塚、赤星直忠らによる横須賀市茅山貝塚など地域の編年研究も盛んに行われるようになった。

1949年(昭和22)から1955年(昭和30)までを、関東地方においては貝塚の調査を通じて縄文時代の上限追及の研究が活発に行われた時期としている。1950年(昭和25)に杉原荘介らが横須賀市夏島貝塚、1951年(昭和26)に芹沢長介・岡本勇が横浜市大丸貝塚、1954年(昭和29)に西村正衛が千葉県香取郡神崎町西之城貝塚を発掘調査するなど早期編年が大きく発展した。

一方、西日本でも、大津市石山貝塚、愛知県知多郡東浦町入海貝塚、豊橋市吉胡貝塚、熊本県宇土市曽畑貝塚などの発掘調査が行われ、地域研究が進捗した。

1960年代(昭和35)については発掘調査が開発に係わって行われるようになり、「大規模な貝塚調査が行われ、それぞれの地域で、今日までに、まったく予期されなかった幾多の新事実が判明」(江坂1978『ジャーナル』148;p. 7)した時期としている。

千葉県船橋市高根木戸貝塚では70軒の住居跡、多数の小竪穴が台地中央を広場とする環状集落として確認された(『高根木戸』1971)。1964年(昭和39)～1965年(昭和40)には松戸市貝の花貝塚の調査が実施され、貝塚と集落の関係が明らかとなった(『貝の花貝塚』1973)。

『高根木戸』では、金子浩昌らによって、鳥獣骨や貝の統計的研究が行われている。また、1961年（昭和36）、1965年（昭和40）には、いわき市寺脇貝塚の調査が実施され、多量に出土した釣針や銛など漁具類の分析も積極的に行われた（『寺脇貝塚』1966）。

1960年代後半になると、赤沢威らによって、貝塚出土の魚骨をサンプリングし、顎骨を計測して体長を推定し、魚の種類、生態を調査し、縄文各期の漁場、漁期の分析を行なわれるなど自然科学的分析もみられるようになった。

1970年代（昭和45）には、各地で経済成長に伴い各地で開発が行われ、これに対処するために埋蔵文化財保護行政の充実とともに、組織的整備も図られ、発掘調査も急増した。考古情報の洪水の中にいる時期としている。貝塚の発掘は、開発に伴うものが主流ということもあり、むしろ可能な限り保存するよう努力することになり、貝塚の発掘は他の時期に比べ少ない状況を呈することになった。また、発掘調査には貝層のサンプリング調査など自然科学的手法も積極的に導入され、小池裕子のハマグリの成長線による捕獲時期の分析、鈴木公雄の魚骨標本の組成研究など注目される研究も行われた。江坂輝彌はこの時期を「自然科学的な研究に次第に手を染める研究者が増加し始めている」（江坂1978;p. 7）としている。

第Ⅳ期（今後の貝塚研究）　江坂輝彌は、今後の考古学研究の見通しを「これからの貝塚調査は一人考古学者のみでなく自然科学者を動員して行うべき」（江坂1978;p. 9）とし、「今後の考古学者はあらゆる自然科学者の知識を広く理解するだけは要求されると思うのである。」（江坂1978;p. 9）とまとめている[3]。

また、戸沢充則は「自然科学的な研究の手法を大幅にとり入れた、いわば縄文人の始業活動や食生活の復原を目指す」（戸沢1989;p.14）段階ととらえている。

（2）自然科学的観点からの貝塚研究史

貝塚研究史を自然科学的側面からまとめたのは、牛沢百合子である。これを「考古学者が貝塚を研究するのは、各々の環境に則した生業の有り方を具体的に明らかにし、さらに時間的な変化の原因を考えるためであろうと思う。」（牛沢1980;p.50）と述べ、「ここでは、貝塚にしか殆ど残ることのない動物遺存体や骨格器等の点に注目し、それ故の特徴的な研究にしぼって考察した。」（牛沢1980;p.50）と位置付けている。

第Ⅰ期（1979～1910）　E．S．モースによって日本の貝塚研究が科学的学問分野の一つとして始められる時期としている。第Ⅰ期も終わりに近い1907年ごろには、石田収蔵、田中茂穂による市川市堀之内貝塚や園生貝塚出土のシカ、イノシシの種や部位の同定の詳細な記述がみられるようになる。

第Ⅱ期（1911～1932）　「岸上鎌吉博士による画期的な『Prehistoric Fishing in Japan』を以てこの時期の冒頭にあてる。大山史前学研究所の貝塚研究の開始までの時期を第Ⅱ期とする。

この時期は、貝類、獣類等が専門家の手により積極的に調査され、それらを根拠とする詳論が発表された。」(牛沢1980;p.52)としている。

この時期には、日本石器時代人らの起源を巡って、アイヌ説とコロボックル説の人種論争が起こり、そのための人骨収集に貝塚の調査が行われた。一方、1919年（大正８）の松本彦七郎の層位発掘を契機として、縄文土器の編年的研究が進み、貝塚は土器編年の確立の重要な資料となった。

これに対して、貝類の分析によって鳥居龍蔵による貝の淡鹹の分岐線、直良信夫による鳥居龍蔵の分岐線の再検討、東木竜七の貝塚の立地と海岸線の復原が行われた。岸上鎌吉は骨角器等と魚類骨を集成した。動物骨については長谷部言人、松本彦七郎の生物学的研究が目立つという。

第Ⅲ期(1933～1955)　「大山史前学研究所の活動が行われた昭和の初期から戦後新たな貝塚の発掘や研究が軌道に乗るまでの時期」(牛沢1980;p.58)を含み、大山史前学研究所の「研究所員であった大給尹や酒詰仲男が漁骨や貝類の考古学的集成に着手した。第Ⅱ期にひきつづき長谷部言人の研究も進展するが、当時の生活ということに視点をすえた直良信夫の著作が目立つ時期であった。骨角器では大山柏と甲野勇の研究の業績に負うところが大きい。」(牛沢1980;p.58)という。

酒詰仲男は貝層の内容、とくに貝類相の調査を行い、貝塚の立地等各要素を組み合わせ多面的な統計処理によって、海岸線の変化を推定した。大給尹は貝塚出土魚骨の調査を行い、日本各地の出土獣骨を集成した（「日本石器時代陸産動物食料」『史前学雑誌６－１』1943)。

直良信夫は動物遺存体研究を精力的に行い、『日本旧石器時代の研究』(1954)、『日本産狼の研究』(1965)、『古代の狩猟』(1941)、『古代日本の漁猟生活』(1946)などを刊行している。長谷部言人は動物遺存体を計測し、原種との比較研究を行った。林田重幸は猪と犬、馬、豚など家畜史的観点から研究した。

第Ⅳ期(1956～)　「動物遺存体の調査が数量化の段階に入り発掘の際の出土状況や資料採集方法に注意が払われるようになる。一方、外部的営力により発掘調査が大規模・長期化するとともに、その中で貝塚の詳細な研究を貫こうとする努力が続けられる半面、貝塚の破壊も深刻になる時期である。貝塚産貝類が古環境復原・年代学等の分野で分析されるが、考古学者が主体的に研究の中で還元し得ているかについて考古学者の反省が求められる時期に来ているように感じられる。」(牛沢1980;p.63-64)としている。

赤沢威・小宮孟による魚骨の統計的研究、小池裕子によるハマグリの成長線の研究、鈴木公雄による貝塚における貝の総量など基礎的研究が進められた。骨角器では、江坂輝彌が釣針の変遷、渡辺誠が釣針・銛を集成した。また金子浩昌は貝塚ごとに動物遺存体等を数量化して比

較検討している。林謙作・西本豊弘は動物遺存体と生業活動を研究している。

（3）集落論的観点からの貝塚研究史

後藤和民（1978）は集落論的観点から貝塚研究について検討を加えたものである。通史でなく、事項別にまとめた点が特徴である[4]。

大正13年(1924)、柴田常恵が富山県朝日貝塚で竪穴住居跡を発掘したのが最初であり、これが集落研究の始まりである。大正15年(1926)、小金井良精らが市川市姥山貝塚を発掘した。当時としては大規模発掘であり、竪穴住居跡23軒、住居跡の新旧関係、特異な人骨の検出状況が注目され、それ以降の集落研究の基礎となった。しかし、この時期、住居の発見にのみ終始し、集落という観点に立ちえなかった。

昭和23年（1948)、和島誠一は原始社会の基礎である共同体と家族の問題提起し、昭和30年(1955)には横浜市南堀貝塚で貝塚全域にわたり大規模な発掘を行い、馬蹄形に展開する集落と中央部の空白である広場を確認した。

その後、昭和35年(1960)には麻生優が「貝塚は遺跡の中において残存しえたゴミ捨場であるという認識に立つことが最も重要なことである。」(麻生,1960;p.9)という〝貝塚＝ゴミ捨て場〟論を提唱した。また、岡本勇は馬蹄形ないしは環状の大貝塚について「住居のあり方が貝層の分布を規制したといえよう。」(岡本勇1963;p.44)という〝馬蹄形貝塚＝馬蹄形集落〟論(後藤1988など)を展開した。以来、昭和39(1964)～40年(1965)の千葉市加曽利貝塚、松戸市貝の花貝塚、昭和43年(1968)の船橋市高根木戸貝塚など大規模調査が相次ぎ、その関心は馬蹄形貝塚とその内側の空白部を中心に向かって行われた。

これに関して、後藤和民は、松戸市貝ノ花貝塚や千葉市加曽利貝塚の貝層堆積の状態を観察し、「貝塚はその集落のごく一部であり、「日本最大」の貝塚でさえ、集落の一部に包含されていたのである。これは、従来の貝塚内集落説に比べるならば、まさにコペルニックス的展開とでもいうべき観点の一大転換であろう。」(後藤,1973;p.30)と述べ、〝貝塚外集落説〟(後藤1988;p.160など）を提唱している。そして、「貝塚の形態や規模と集落の範囲とは関係なく、集落とは、むしろ大型貝塚をもその内側に包含するほどに広範囲に展開する可能性」(後藤1978;p.11)を考え、「一日も早く集落の限界を確認することによって、その必要範囲を保存することこそ最大の急務」(後藤　1978;p.12)としている。

さらに、遺跡を(1)貝塚を伴わない集落、(2)小型貝塚を伴う集落、(3)集落を伴わない貝塚、(4)大型貝塚を伴う集落、に分けている（後藤1985;p.390-391)。(3)については「日常の食糧残滓を投棄した消費的な「ゴミ捨場」とは考えられない。むしろ、生産的な活動の跡と考えるほうがはるかに妥当であろう。」(後藤1985;p.391)とし、その例として、千葉市宝導寺台貝塚・茨城県陸平貝塚・市川市久保上貝塚・根古谷貝塚などをあげている。また、(4)について

「無数の中間層が挾まっており、その存在期間もたびたび欠落する時期があって、明らかに断層を示している。しかも、同一地点においても環状や馬蹄形になるように集中的に大量の貝殻が堆積しているので、これは同一集落内における投棄地点の移動でなく、長期にわたる回帰性を示すものと解される。」(後藤1985;p.392)として、大型貝塚の歴史的意義を究明するためには、「大形貝塚の生成ー発展ー衰退の過程を、それ以外の遺跡との対比において捉える必要がある。」(後藤1985;p.393)としている。

また、「貝殻は常に同一地点において連続して捨てられたのではなく、時期によって投棄の場所が移動していたことが明らかになっている。」(後藤1985;p.380)として、「その貝塚が形成された縄文時代のいかなる時期においても、「馬蹄形貝塚」は存在していなかった」(後藤1985;p.380)と述べ、馬蹄形集落論に反論している。そして、最終的にはその形態が馬蹄形や環状に統一されることに対して「もはや集落の形態がそのゴミ捨場の形態を規定したものとは考えられない。むしろ、集落の形態や住居址の展開とは直接関係なく、貝塚それ自体の存在理由によって、おのずから構成された独自の形態、すなわち、貝類の大量採捕とその貝殻の投棄という行動の目的やその機能によってこそ必然的にもたらされた結果と考えるべきであろう。」(後藤1985;p.396)と結論付けている。

さらに、大型貝塚は、千葉市加曽利貝塚・神奈川県荒立貝塚・市川市曽谷貝塚などで「貝層の上で行われた焚火の跡」(後藤1985;p.398)が確認され、「…そこで大量の貝を土器で煮たような共同の作業が行われていた。すなわち、この大型貝塚は個人的な消費の場であるよりは、何か集団的な生産の場であったと考えるべきである。」(後藤1985;p.398)とするとともに、大型貝塚が「後期末葉から晩期初頭にかけて急速に減少し」(後藤1985;p.399)、これと時を同じくして、「茨城県霞ヶ浦沿岸において、にわかに製塩が開始される」ことから、「その貝類が塩の役割を果たしていたと考えるべきである。」(後藤1985;p.399)としている。

また、千葉県が「石なし県である」ということに着目し、「大型貝塚における大量の干貝加工も、このような沿岸貝塚における大量の干貝加工も、このような沿岸地域に乏しい石材や石器と交換するためにこそ、山間地域に乏しい海産物や保存食糧として生産加工されていたのである。」(後藤1985;p.401)としているのである。

これに対して、鈴木公雄は貝塚における貝の総量を詳細に分析し、そのカロリーを計測し、「貝はきわめて低カロリーな食品であり、またその利用効率も極めて低く、縄文時代の食糧源の中でけっして高い評価を与えられていないもの」(鈴木1979;p.27)であることから、「貝塚に堆積した大量の貝殻は干貝加工という保存食製作の結果であるよりも、それぞれの貝塚の構成員の自家消費に主としてあてられていると考えている。」(鈴木1979;p.27-28)、そして「いつでも容易に安定した量で採集できるという貝類の利点が、殻の量が多く、カロリーが低いという以

上に、先史時代の食糧として重要な意味を持って」(鈴木1989;p.68)いると述べているのである。また、小池裕子は、「食糧状況が緊迫してくると、身近にある栄養価値が低い欠点をもつ"予備食物"が摂取される」(小池1992;p.29)として、食物全体からみると貝は補助的なものであると鈴木公雄の考えを追認している。これらは山内清男の貝塚貧乏説の再評価とも言えよう。

また、鈴木公雄は、伊皿子貝塚・木戸作貝塚・加曽利南貝塚を資料として、貝層の堆積を形成期間を算出し、「他の多くの縄文貝塚で…(中略)…それほど極端な規模の差を示さない」(鈴木1985;p.42)とし、それらがほぼ同じ人口規模を維持していると考えている。そこから縄文社会の地域集団の規模における「ある種の発達許容限界」(鈴木1985;p.43)を想定し、それは「その集団を取込む自然環境に内在する生物経済的枠組みそのものにあった」(鈴木1985;p.43)としている。

(4)小括

このように縄文時代貝塚研究の特徴は、大森貝塚の発掘以来、縄文編年の素材、さらに社会・経済の資料として利用されてきたことにある。特に、近年、後藤和民の大型貝塚に対する一連の集落論など貝塚研究の成果は注目すべきものがあり、また自然科学的手法によって後藤の干貝加工説が検証されるなど、縄文時代社会・文化研究が大きく発展している。今後も自然科学的手法を活用した研究の深化が期待されるところである。

しかし、ここで注意したいのは貝塚研究史からみると、戦後、貝塚研究が実証的方向に進んだのに対して、精神生活の復原は物証に乏しいため、観念的に扱わざるを得なかったことによるのであろうが、冒頭で指摘したように、精神生活という観点からの研究についてはほとんど触れられていないことである。

3．精神生活からみた貝塚研究史

前項でみたとおり、貝塚は人種論や縄文時代土器編年の素材として活用されていたが、第2次大戦後には、考古学研究の発展に伴い、縄文時代の社会・文化研究の資料として様々な面から検討されるようになったことを知ることができる。特に、現在は、自然科学的調査研究の手法が導入され一躍の発展が期待されている。しかし、精神生活面からの貝塚研究は積極的に行われなかったと言えよう。

そこで、この点から貝塚研究史をみてゆきたい。

第Ⅰ期(昭和前半期)　昭和10年(1935)は、縄文時代土器の編年研究が一応の成果をみて、ようやく竪穴住居跡など遺構にも目が向けられるようになってきた頃である。土器の編年研究は地域研究が盛んとなり、細密化に向かった。

北海道は、明治から大正時代に人種論としてのコロボックル説、アイヌ説の舞台となっていたが、ようやく昭和10年前後には縄文時代土器の編年研究に呼応して土器の編年研究が進められた。

こうした中、河野廣道は貝塚に人骨が埋葬されていることが多いことに対して、「貝塚人骨の謎を解いてくれたものは、アイヌのイオマンテの思想に他ならない。」(河野 1935;p.11)とし、貝塚が単なるゴミ捨て場でなく、アイヌにみられる「物送り」の儀式、イオマンテの行われた場所であり、本州の貝塚も同様であり、また霊送りの場と説いた。

以後の貝塚観に大きな影響を与えたことからすると、河野論文(1935)は精神生活研究の原点といえよう。縄文編年が主流であったこの時期、精神生活を研究した稀有な例であり、忘れることできないものである。考古学の成果が取り入れられることなく、観念的な説明であると評価する向きもあろうが、当時の環境を考えるとやむを得ないことであり、その評価が下がることはないであろう。宇田川洋は「今も評価を値するものと信じている。」(宇田川 1989;p. 6)としている。

なお、宇田川 (1989)は、擦文文化が終了するのは13世紀前後、アイヌ文化はその後であり、アイヌ文化は14世紀〜18世紀末までの「原アイヌ文化」とその後の「新アイヌ文化」な分けられ、送り場形式として「貝塚を意識する」時期を16世紀としている。

第II期(戦後〜昭和49年)　第2次大戦終了後、日本考古学は新たな視野で科学的に研究されることとなった。その対象は関東ローム層にまで進み、縄文時代研究もその上限の編年的研究が精力的に実施された。そして、約10年、考古学研究も一応の成果を見ることができる。これは『日本考古学講座』『考古学ノート』などにまとめられた。

その後、約10年、日本の先土器時代や縄文時代の編年の大綱ができ上がった。その成果は『日本の考古学』などにみることができる。

このような時期、精神生活の成果は「信仰」(西村 1956)、「貝塚」(江坂 1957)、「埋葬」(西村 1956) などとして取り上げられた。貝塚について、西村正衛は「現在の単なる塵捨場という観念を超えた意味のあったことと考えざるを得ない。」(西村 1956;p.304)、江坂輝弥は「貝塚はただごみためではないと考えられる。」(江坂 1957;p.71)と述べ、単なる貝塚ごみ捨場説に対して疑義を表しているのである。

また、河野廣道の考え方について、江坂輝弥は「たしかに傾聴に値いする。」(江坂 1957;p.71)とし、西村正衛は「貝塚はすべて生命をうしなったものー現世の生活から離れたものの存在する場所としてみなされていたのではないかと推定する。この行動類型は、河野廣道が指摘しているようにアイヌの物送りということを意味するイオマンテという慣習と類似したものではなかったかとおもう。」(西村 1967;p.349〜350)と述べている。いずれも河野説に対してやや距離

を置いた慎重な見解を示している。

この時期、縄文時代研究の主流は土器編年であり、精神的な面に目が向けられていなかった。当然のことではあるが、縄文時代精神生活研究には考古学の成果が取り入れらず、観念的であった言えよう。しかし、発掘調査の成果を取り入れた研究もみられるようになった。戸田哲也は、町田市田端遺跡出土の配石遺構を検討する中で貝塚と破棄住居に注目した。

①貝塚にみられる貝殻、獣骨そして埋葬されている人骨などは「これらは捨てられたと言う意識でとらえられるものではなく、使用の終わった、あるいは、使用する機能を止めて、それら全てを、戻す、送る、といった意識でとらえられるものと考えたい。」(戸田 1971;p. 8)、

②廃棄した住居跡を利用した貝塚は、「住居跡自体も送る、もどす、といった意識でとらえられるものであろう。」(戸田 1971;p. 8)と述べ、「人骨も含めてあらゆる生活遺物、自然遺物がみられる背景には、それが行くべき世界というものが存在していたのか、あるいは転生する意識のもとで再生を願ったのか。このことは縄文人と他界観といった重要な意味を持つのである。」(戸田 1971;p. 8)とし、さらに「貝塚遺跡にみられる現象こそ、縄文時代におけるアニミズムの存在を指摘しうるもの」(戸田 1971;p. 9)と論考している。

高山純は各地に分布する配石遺構を集成し、「アイヌの「物送り」(イヨマンテ)の信仰が、縄文時代に適用出来るという前提に誤りがないとするならば、配石遺構にみられる焼けた骨類もほぼ同じ信仰に基づいてなされたものであろう。」(高山 1977;p.69)と分析している。

また、「従来の縄文時代の埋葬の研究の大きな欠陥の一つは貝塚を残した人々と残さなかった人々ー生業の差かもしれないーの間の信仰の差を考えなかったことではないか」(高山 1977;p.65)とし、貝塚を残した人々の間には「アイヌの「物送り」的信仰が根底にあったことは略明らかになりつつある。つまり、ここでは骨類は焼かないで捨てたのが一般的であった。」(高山 1977;p.65)、一方、貝塚を残さなかった人々は「配石遺構のまわりで骨類を焼き撒いた訳であるが、その理由はアイヌなどに見られる家を焼いてあの世に持たせてやる、という信仰と相い通ずるもの」(高山 1977;p.65)としている。すなわち、埋葬のあり方を貝塚と他の遺跡とで比較検討しているのである。このような貝塚出土の獣骨等遺物からの比較研究は、以後の研究の主流となるのである。

第Ⅲ期(昭和50年～現在)　昭和50年代後半になると、考古学研究に自然科学的手法が大幅に導入され、新たな考古学が展開される。しかし、精神生活の復原は実証が困難であり、観念的な記述も多い。しかし、精神活動の分析に発掘成果が着実に活用されようになってきた。

(1)貝塚と動物祭祀

大竹憲治は、「狩猟・漁撈に関する動物祭祀遺構が近年発見されるようになり、縄文時代の精神文化解明に新たな展開を見せている。」(いわき市 1986;p.156)とし、その例として福島県大熊

町道平遺跡、いわき市大畑貝塚、下山口貝塚、薄磯貝塚をあげ、縄文時代の動物祭祀を「貝塚に於ける動物祭祀と内陸部（山間地をはじめ貝塚以外の場所で行われた祭祀をすべて含め）の動物祭祀」(大竹 1983;p.272)に分け、次のとおり分類している。

A類（貝塚における動物の祭祀）

Ⅰ型　大畑、薄磯貝塚のように貝塚の貝層中若しくは貝層下にイノシシやニホンジカ等の獣骨を据え、物送り的祭祀をするもので貝塚を祭場とする規模の大きな祭祀遺構。

Ⅱ型　薄磯貝塚の貝層中にみられたもので大形の石皿状礫でニホンジカの下顎を覆ったもの。規模は小さいが、獣骨に対する呪術行為若しくは祭祀と思われる。

Ⅲ型　動物の遺体を損解することなく埋設する様相として類形に加えることにした。

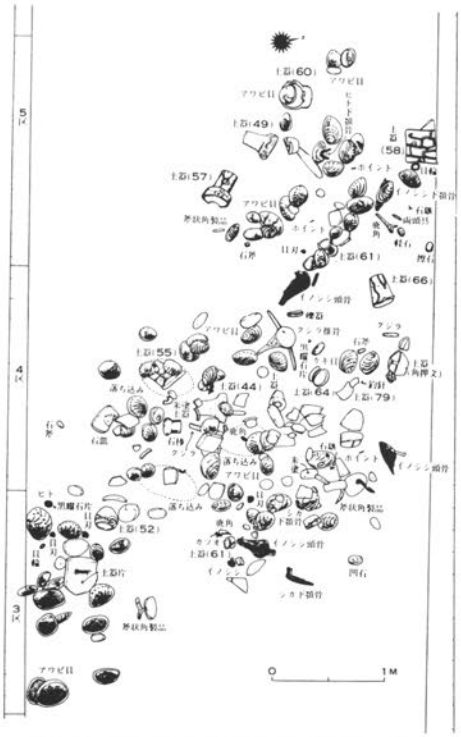
B類　下山口タイプ　厳密には貝塚の中に営まれたものでない。貝塚から外れた場所で祭祀を行った。下山口貝塚ではイノシシの下顎骨を石皿状石製品及び礫で覆ったもの。

C類（内陸部における動物の祭祀）

Ⅰ型　道平タイプ　獣骨を土器に埋納。従来の埋甕。

Ⅱ型　金生タイプ　獣骨を土坑に埋納、焼骨。

なお、「埋設土器内部に人為的に獣骨一部（焼成された動物小骨片を含む）を収納する埋設土



第１図　E地点最下層(砂層直上)のアワビを中心とした特殊遺構
（「大畑貝塚調査報告」より）

第２図　道平遺跡におけるイノシシ土製品
（「道平遺跡の研究」より）

器に対して以後は、獣骨蔵土器という名称を設置し、深鉢棺、埋甕などの埋設施設・呪術施設とは一線を画した縄文時代の内部における狩猟に関する動物祭祀一つのパターンと止揚したいと思う。」(大竹 1983;P.260)と埋設土器の性格の多様性を指摘している。

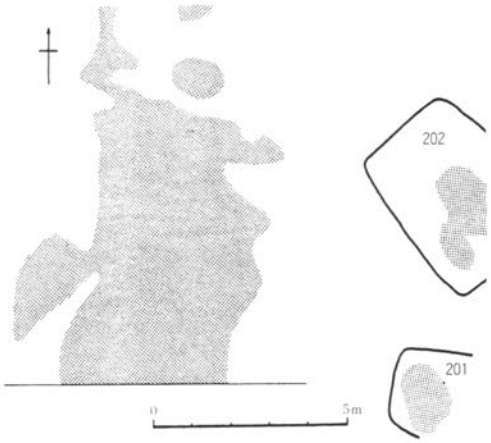
このような狩猟に関する動物祭祀について、西本豊弘は「北方諸民族の民族誌を参考として、縄文時代にも動物にも動物が深く関わった狩猟儀礼などがおこなわれており、ばあいによってはアイヌの「物送り」的儀礼もあったかもしれないと考えている。しかし、これはごく一般的な意味でそのように考えているだけであって、縄文時代の動物と儀礼については、時期差・地域差、遺跡の性格の相違などを考慮して、考古学的資料を主体に立論すべきであろうと考えている。」(西本 1983;p.54)とし、「縄文時代晩期ーばあいによって後期中葉以降ーから埋葬儀礼または信仰におけるなんらかの儀礼にともなって、「火」で物を焼くという風習が広まったのでなかろうか。」(西本 1983;p.55)という。

(2)貝塚と廃棄住居

廃棄した住居跡を利用した貝塚に注目して「縄文人と他界観」を論考したのは、戸田哲也 (1971)である。このような考えについては土器破棄パターンという点から検討されるようになる。

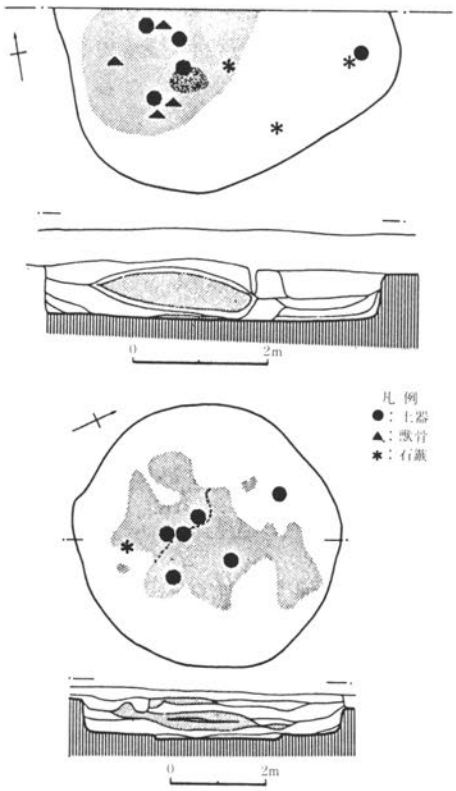
土肥孝は、「「廃屋墓」も広い意味で貝塚と呼ばれていることから、縄文時代中期の貝塚は「ゴミ捨て場」だけの機能で考えるべきでなく、人間の輪廻(発生→成長→消滅→再生)の消滅・再生という観念に対する、縄文人の精神活動の材料をも提供する場といえるのである。」(土肥孝 1982;p.23)としている。

末木健は、「移動を繰り返していた集団は、移動途中で主が死亡した家を再利用することなく放置し、家に宿っている人の霊や家魂を鎮めるために、窪地化した家に、土器や石器、生活用品を投げ込み、「供養」「送り」の行事をおこなったともいえる。」(末木 1983;p.72)、また、「貝塚には集落をとりまく環状貝塚や斜面貝塚などがあるが、こうした場所には、完形土器、石器、骨角器などのほかに埋葬人骨等が発見される。貝塚以外では人骨や獣骨、貝、骨角器などの発見はまれで、腐敗してのこらないばあいが多い。このような場は一家族の捨場というより、集団で定められた破棄の場であり、「役目の終った物が自然に戻され送られる場」として位置づけられることが多い」(末木 1983;p.73)と述べている。

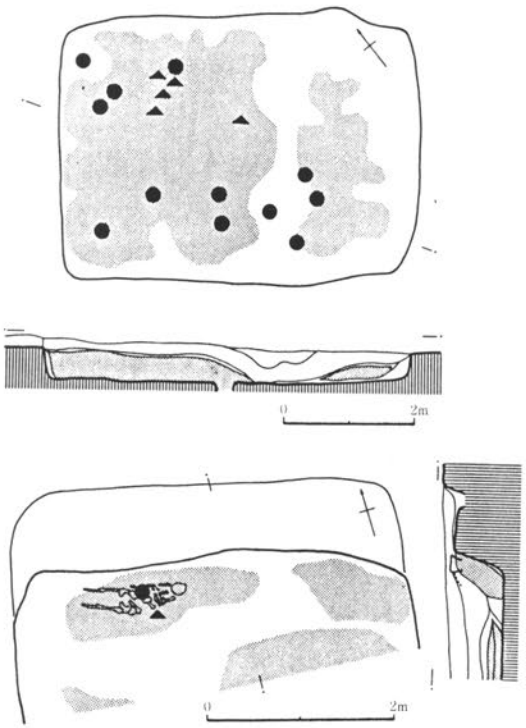


第3図 A型貝塚の例(幸田遺跡第Ⅲ地点 スクリーントーン:貝塚)

関根孝夫は、松戸市貝の花貝塚・幸田貝塚・



第4図　B型貝塚の例（上．幸田遺跡407A号住居跡　下．子和清水遺跡31号住居跡）



第5図　C型貝塚の例（上．幸田遺跡203号住居跡　下．同38号住居跡）

子和清水貝塚を3分類し、土器破棄パターンを想定し、貝塚の意味を考えている(関根 1985;p68-69)。

A型（住居群とは離れて、やや広い面的拡がりを持ち、平板状に貝層が堆積した貝塚）は斜面貝塚であり、①日常的・継続的な食料の残滓の場、②干貝生産加工場の貝殻破棄の場である。

B型（住居が破棄されて、埋没土が形成され生じた窪地に貝殻が投棄されてできた貝塚）は、A型、C型の中間型としての様相をもつが、「廃墟の窪地をゴミ捨て場に利用したのでなく、強く家屋が意識され、そこには族的継承としての家霊の信仰と、これと結合した自然物の再生と豊饒の願いが、常に潜在的に存したとみたいのである。」、土器破棄パターンとしての「吹上パターン」が考えられる。

C型（床面あるいは床面直上で貝殻を積み上げた状態の貝塚、山積貝塚）は、貝塚真下、床面上の獣骨（特に顎骨が目立つ）集積、焼土・灰、土器の配置、大形土器片の意図的な敷設などであり、これは「関山パターン」と仮称される。

この種の貝塚を「狩猟・漁撈活動を背景とした「モノ送り」などの儀礼に関連し、さらに家屋と結びついた宗教的な儀礼が存したことを推定したい。」(関根 1985;p.68)という。

（3）送りとしての貝塚

物送りという貝塚観は、昭和初めに河野廣道が説いた考えであり、本稿の発端となった梅原猛の考えと同じである。関根孝夫は、前項でみたとおり、発掘調査の成果を取り入れ、この点について検討を加えている。

また、前田潮は、大畑貝塚・水子大應寺前貝塚・幸田貝塚を例にとり、縄文時代前期の貝塚では「「貝送り」のほかに狩猟獣として重視されたと考えられる鹿・猪の送りもあったと思われる。」(前田 1983;p.74)と述べる。また、前期の点在貝塚を「個々の住居がすべて貝塚を遺すわけでないので、貝送り、家送りは特定の動機のもとに行われたとみるべき」(前田 1994;p.78)とし、また中期の点在貝塚についても前期同様「非合理的、経済外的動機による貝塚形成風習という見方を敷衍して良いように思われる」(前田 1994;p.78)としている。

第Ⅳ期(今後の貝塚研究)　近年、精神生活における貝塚研究は、貝塚の貝層中から出土した獣骨等の分析を通しての狩猟・漁撈に関する動物祭祀、破棄住居内への貝や土器などの投棄を分析した土器破棄パターンなどの研究へと向かっている。そうした中で精神生活復原に発掘調査の成果が反映されるようになってきた。また、遺跡間の祭祀の比較研究も行われるようになった。大畑貝塚はその研究方向を暗示するものとして重要である。

岡本道雄は、貝塚について「単にゴミ捨て場ではなく、人々を葬り、祭りをした場所でもあり、縄文人にとっては、いわば「聖なるゴミ捨て場」とも呼ぶべき所だった。」(岡本 1994;p.12)、「貝塚に人が埋葬されているのも一般的である。また、イルカやクマの頭骨を円形に並べるなど、送りの儀式が行われた痕跡が明らかに残った例もあり、これまでも見てきたように貝塚は単なるゴミ捨て場ではない。当時の人々にとって、不用となったゴミも人の遺骸も神聖であると同時に、彼らに恵みを与えてくれたものであり、再び帰ってきてほしものであったのであろう。」(岡本 1994;p.64)と縄文人の生活の豊かさを強調している。このように縄文時代の社会、文化の復原とそのことを考古学的に実証することが今後の大きな課題であり、貝塚を多様にみることが、今、要請されていると言えよう。

4．まとめ

貝塚研究史からみると、貝塚は人種論や縄文時代土器編年の素材として活用され、その後縄文時代社会文化の復原を目的とし、自然科学的手法が導入されるなど多様に研究されるようになった。それは貝等の様々な分析による食生活様式、それを踏まえた集落研究である。

後藤和民は東京湾沿岸地域に所在する大型馬蹄形貝塚を集落という視点から検討し、干貝加工説、さらに交易経済をも考えた。この干貝加工説を容認する見解は多い。これに対して、鈴木公雄氏は貝の総量の分析を通じて、貝の自給自足説あるいは貝塚貧乏説を説く。いずれにし

ても、それは自然科学的手法による分析によって決着することになろう。このような貝塚研究は縄文時代の社会文化を復原するために大きく貢献することが期待される。

一方、精神生活に関しては、物送りという貝塚総体に対する観念的考えから始まり、貝層から出土する獣骨、廃棄住居の貝や土器の分析によって、個々の祭祀形態、遺跡間の祭祀の比較研究へと発展してきたと言えよう。

貝塚研究について、精神生活という視点から次のような発言がある。

① 「貝塚は「ゴミ捨て場」とのみ規定して考えていくのは難しいようである。」(土肥孝 1982;p.23)

②「縄文貝塚の性格を追及するにさいして……経済現象としてとらえる見方とともに、その精神性の問題を取り上げないわけに行かない。」(前田潮 1983;p.74)

③「貝塚は、特殊な場合を除き、常に貝が食料として供され、利用された結果として形成されたものである。それは単に廃棄物として処理されたことを意味するばかりでなく、縄文人の信仰上の思惟とそれに基づく行為の結果をも指示しているとみたのである。」として、「貝塚とは何かといった、貝塚の形成や意義などに関しては、旧来のゴミ捨て場説が強固なあまり、一部に信仰上の意義が主張されてもさしたる展開がみられない。」(関根孝夫 1985;p.70-71)

これらから貝塚研究における精神生活研究の実態を垣間見ることができよう。従前の貝塚研究は社会的な分析が主流であり、精神生活復原という視点が欠けていたのである。ここにその再検討の必要性を感じたのである。今後の多様な貝塚研究を期待し、また発掘調査を実施するに当たって精神生活復原という視点を持つことを願いたいのである。

なお、縄文時代の精神生活の復原については、様々な試みが行われている。本稿では貝塚を主軸としたため、多くのすぐれた論文について触ることができなかった。機会があれば、これをも含めて考えてみたい。

最後に、本稿を執筆するに当たって、各種論文を引用、参考とさせていただいた。感謝の意を表したい。また、本文中では敬称を省略させていただいた。お許し願いたい。

注

(1)貝塚について、梅原猛がゴミ捨て場から貝の墓場へとそのとらえ方が変化し、それが今や通説化しているとしたことに疑問を感じたこと、宗左近の千葉県の某博物館の学芸員に対する記述についてショックを感じたことなどから、長文であるがあえて引用した。

(2)江坂輝弥は1970年代を5期に区分している。これに沿って研究史をまとめた。誤りがあれば、筆者の不徳とするところである。

(3)これは、江坂輝弥が大森貝塚100年を振り返るために記述したもので、1970年代、すなわち第III期に含んでいるが、貝塚研究の進むべき方向に誤りはないと考え、ここに入れた。

	精神面からみた貝塚研究史＊		貝塚研究史概要
1877		I 期	E.S.モース(1877)東京都大森貝塚発掘 佐々木忠次郎他(1879)茨城県陸平貝塚発掘 松本彦七郎(1918～)分層発掘、編年研究方法論の礎
I 期	河野廣道(1935)貝塚＝物送り	II 期	山内清男(1925頃～1931頃)東北日本の縄文土器編年研究 小金井良精他(1926)市川市姥山貝塚発掘 田沢金吾(1935)貝塚＝塵捨場 山内清男(1937)全国の縄文編年研究
1945			
II 期	西村正衛(1956)貝塚≒物送り 江坂輝弥(1957)貝塚＝物送り 戸田哲也(1971)廃棄住居と貝塚(＝送る、もどす場) 西村正衛(1974)貝塚＝生命を失ったものの存在する場所	III 期	明治大学(1950)横須賀市夏島貝塚発掘 船橋市高根木戸貝塚等大規模発掘(1960) 麻生　優(1960)貝塚＝ゴミ捨て場論 岡本　勇(1963)馬蹄形貝塚＝馬蹄形集落論 赤沢　威(1969)魚類の生態研究 後藤和民(1973)干貝加工説 小池裕子(1973)貝採集の季節性
1975			
III 期	高山　純(1976、1977)貝塚＝物送り 土肥　孝(1982)貝塚＝消滅：再生 前田　潮(1983)前期貝塚＝貝送り、家送り 西本豊弘(1983)動物祭祀 末木　健(1983)貝塚＝送りの場 大竹憲治(1983)貝塚と山陸部の動物祭祀 関根孝夫(1985)土器廃棄パターンと貝塚 宗　左近(1991)貝塚＝聖なる場所 梅原　猛(1992)貝塚＝貝の墓場 県センター(1993)貝塚＝廃棄の規則性 岡本道雄(1944)里浜貝塚からの縄文社会復原	IV 期	江坂輝弥(1978)『日本の貝塚研究100年』(ジャーナル144・145・147・148) 石井則孝他(1978)『縄文貝塚の謎』 鈴木公雄(1979)貝の総量 牛沢百合子(1980)『縄文貝塚研究史序説』(どるめん24.25) 鈴木公雄(1989)『UP考古学選書5　貝塚の考古学』 戸沢充則他(1989)『考古学ゼミナール　縄文人と貝塚』

＊貝塚研究の一面を取り上げたものであり、多くの研究者がゴミ捨て場としての機能を認めていることも注意しておきたい。

表　貝塚研究史

（4）後藤和民(1978)は、漁撈活動、集落という点から貝塚研究を進めている。本稿では、これに沿ってまとめたために、集落論の研究史とはかけ離れたものになってしまった。

引用参考文献

麻生　優　1960「縄文後期の集落」『考古学研究』第7巻第2号

石井則孝他　1978『シンポジウム　縄文貝塚の謎』新人物往来社

市立市川考古博物館　1992『堀之内貝塚資料図譜』市立市川考古博物館

今井公子　1982「いわゆる馬蹄形貝塚の中央凹地についての一考察」『論集房総史研究』　名著出版

いわき地域學會出版部編集委員会編集　代表　馬目順一　1991「新しいいわきの歴史」『いわき地域學會図書』1　いわき地域學會出版部

いわき市　1986「原始・古代・中世」『いわき市史』

牛沢百合子　1980「縄文貝塚研究史序説」『季刊どるめん』24,25号

梅原　猛　1992『日本冒険　第1巻』角川文庫（現本は、1988『同　名』　角川書店）

梅原　猛・中上健次　1994『君に弥生人か縄文人か－梅原日本学講座－』　集英社文庫

宇田川洋　1987「擦文文化における「物送り」の信仰・儀礼」『北海道考古学』第23輯

宇田川洋　1985「北方の風土と北海道のすまい」『別冊考古学ジャーナル』1号

宇田川洋　1989「イオマンテの考古学」『ＵＰ考古学選書』8　東京大学出版会

江見水蔭　1915「貝塚に就て」『人類学雑誌』第30巻第2号

岡本　勇　1963「加曽利貝塚の意義」『考古学研究』第10巻第1号

岡本道雄　1994「縄文物語－海辺のムラから－」『朝日百科－歴史を読みなおす1』朝日新聞社

大竹憲治　1983「縄文時代における動物祭祀遺構に関する二つの様相－東北地方南部の資料を心として－」『道平遺跡の研究』福島県大熊町教育委員会

江坂輝彌　1957「貝塚」『考古学ノート』2－先史時代II－日本評論新社

江坂輝彌　1978「日本の貝塚考古学100年」『考古学ジャーナル』144,146,147,148

河野廣道　1935「貝塚人骨の謎とアイヌのイオマンテ」『人類学雑誌』第50巻第4号

小池裕子　1973「貝類の研究法－貝類採集の季節性について－」『考古学ジャーナル』80

小池裕子　1979「関東地方の貝塚遺跡における貝類採取の季節性と貝層の堆積速度」『第四紀研究』17－4

小池裕子　1992「縄文の生業動態と食性分析」『季刊考古学』41

後藤和民　1973「縄文時代における東京湾沿岸の貝塚文化」『房総地方史研究』（株）雄山閣出版

後藤和民　1974「東京湾東岸の貝塚群とその保存」『考古学研究』第21巻第2号

後藤和民　1977「狩漁撈の技術と変遷」『日本考古学を学ぶ』（1）有斐閣

後藤和民　1978「貝塚のとらえ方」『考古学ジャーナル』144

後藤和民　1980「縄文集落と貝塚－東京湾沿岸の漁労を中心として」『どるめん』24・25号

後藤和民　1982「縄文時代における生産力の発展過程」『考古学研究』第29巻第2号

後藤和民　1982「縄文集落の定着について－東京湾東沿岸の貝塚と集落を中心として」『千葉史学』2

後藤和民　1985「馬蹄形貝塚の再吟味－東京湾東沿岸における縄文集落の一様相」『論集日本原史』吉川弘文館

後藤和民　1986「加曽利貝塚の生産と交流」『日本の古代』第4巻－縄文・弥生の生活（森浩一編）中央公論社

後藤和民　1988「縄文集落論」(『論争・学説日本考古学』第2巻－先土器・縄文時代Ⅰ－
佐原　真　1980「海の幸と山の幸」『日本生活文化史』第1巻－日本的生活の母胎－河出書房新社
末木　健　1983「土器破棄と信仰」『歴史公論』第94号
鈴木公雄　1979「縄文時代論」『日本考古学を学ぶ』(3) 有斐閣
鈴木公雄　1979,1980「貝類における貝の総量について（上）（下)」『考古学ジャーナル』170,171
鈴木公雄　1982「伊皿子と木戸作－二つの縄文時代貝塚の比較をめぐって－」『稲・舟・祭　－松本信廣先生追悼論文集－』六興出版
鈴木公雄　1985「縄文貝塚の規模」『日高見国－菊池啓二郎学兄還暦記念論集－』
鈴木公雄　1989「貝塚の考古学」『ＵＰ考古学選書』5　東京大学出版会
関根孝夫　1985「貝塚覚書」『日本史の黎明－八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』六興出版
宗　左近　1991『日本美　縄文の系譜』新潮選書
高山純　1976,1977「配石遺構に伴出する焼いた骨類の有する意義」(上・下)『史学』第47巻第4号、第48巻第1号
田澤金吾　1935「貝塚」『ドルメン』昭和10年6月号
(財) 千葉県文化財センター 1993「縄文時代（2)」『房総考古学ライブラリー』3
土肥　孝　1982「縄文時代II（中期)」『日本の美術』第190号
樋泉岳二　1992「貝塚出土の貝・骨の語るもの」『季刊考古学』41
戸田哲也　1971「縄文時代における宗教意識について－田端環状積石遺構を中心として」『下総考古学』4
西村正衛　1956「信仰」『日本考古学講座』第3巻－縄文文化－　河出書房
西村正衛　1967「埋葬」『日本の考古学』II－縄文時代－　河出書房
西村正衛　1974「貝塚と集落」『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館
西本豊弘　1978「オホーツク文化の生業について－動物遺存体による生業活動の復元－」『物質文化』31
西本豊弘　1983「縄文時代の動物と儀礼」『歴史公論』第94号
前田　潮　1983「貝塚にみる縄文時代の精神生活」『歴史公論』第94号
前田　潮　1994「いわゆる点在貝塚の性格について」『日本と世界の考古学－現在考古学の展開－』岩崎卓也先生退官記念論文集　雄山閣出版
戸沢充則　1989「貝塚を発掘する」『考古学ゼミナール－縄文人と貝塚－』六興出版
千葉県教育委員会　1983『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』
堀越正行　1974「馬蹄形貝塚研究序論」『史館』第4号

(財団法人千葉県文化財センター調査研究部)